

法の水菱

大正大学講師 高橋 秀城

(73)

今年(ことし)の日本(にっぽん)列島(れいとう)は、例年(れいねん)よりも梅雨(つゆ)明け(あけ)が早(はや)かったようです。七月(しちがつ)七日(にち)の七夕(たなばた)には、織姫(おりひめ)と彦星(ひこぼし)は無事(むじ)に巡り逢(あ)えたでしょうか。あるいは曇天(曇り)の夜空(よぞら)から、涙(なみだ)の「催涙雨(催涙)雨(あめ)」がボロボロと溢(あふ)れ落ちてきたでしょうか。

銀河(ぎんが)澄明(せいめい)たり
素秋(すあき)の天(あま)
また見る(みる)林園(りんえん)に
白露(はくろ)の円(ま)かなるを
白露(はくろ)の円(ま)かなるを

（和漢朗詠集「源順」）
秋(あき)の夜空(よぞら)が深(こ)くわたって、天(あま)の川(がは)が輝(かがや)いている。地上(ちじやう)の木々(きぎ)の茂(さ)った庭園(ていえん)には、玉(たま)のような白露(はくろ)が光(ひかり)っている。

「素秋(すあき)」という秋(あき)の異称(いせう)が見え(み)るところに、現代(げんたい)の私(わたし)たち(たち)は少(すく)し違和感(わご)を覚(おぼ)えるかもしれません。もともと七夕(たなばた)は、月(つき)の満ち欠け(みちがけ)を基準(きせん)にした暦(れき)（旧暦(きうれき)）に合わせて行(い)われお盆(おぼん)（旧暦(きうれき)の七月(しちがつ)十五(じゅうご)日(にち)）

日前(ひる)後(ご)とも深(こ)く関(か)わる年中(ねんちゆう)行事(ぎぎ)でした。ほとんどが立秋(たてあき)を過ぎ(すぎ)た頃に当た(あた)ることから、俳句(はいく)などでは、七夕(たなばた)は秋(あき)の季語(きご)として用(もち)いられていま

この漢詩(かんし)にある「素秋(すあき)の「素(す)は「白(しろ)を表(あらわ)し、「白露(はくろ)とともに白(しろ)の色彩(しき)が詠(よ)まれていま。白(しろ)は、中国(ちゆうごく)の五行(ごぎやう)説(せつ)で秋(あき)に配(は)きられること(こと)から「白(しろ)秋(あき)」という語(ことば)も生(う)まれました。

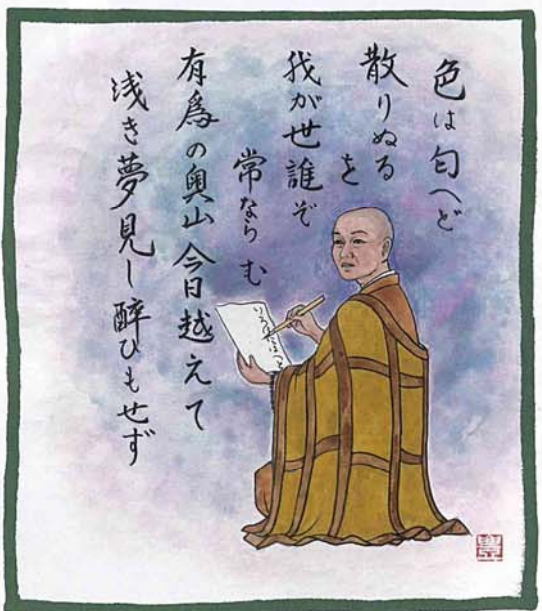
ちなみに、旧暦(きうれき)の七夕(たなばた)の夜(よ)は、例年(れいねん)上弦(じやうげん)の月(つき)となっていて、月(つき)の光(ひかり)の影(かげ)響(ひび)く受(う)けること(こと)が少(すく)ないそうです。庭(にわ)の秋草(あきくさ)に置(お)く玉(たま)のような夜露(よ露)には、きつと無数(むすう)の天(あま)の川(がは)が映(うつ)り込んでいた(いた)でしょう。星空(ほくそう)と白露(はくろ)の煙(えん)めき(めき)に包(つつ)まれた光景(こうけい)が想(おも)像(ざう)されます。たとえ今(いま)月(つき)の七夕(たなばた)が雨模様(あめよう)でも、月遅(つきおそ)れの七夕(たなばた)

（八月(はちがつ)七日(にち)の立秋(たてあき)の日(ひ)や、旧暦(きうれき)の七夕(たなばた)の日(ひ)（今年(ことし)は八月(はちがつ)十七日(じゅうしちにち)）に契(きり)りを交(ま)わすチャンス(チャンス)がある(あ)るかもしれない(かもしれない)。

「歳月(さいげつ)人を待(まち)たず」という言葉(ことば)があります。年(とし)月は(つき)人の都合(にんご)に関(か)わりなく過ぎ(すぎ)去(さ)り、「瞬(ゆび)もとどまらない」という意味(いみ)のように、時間(じかん)は私(わたし)たちの意思(いし)に関(か)わりなく、刻々(こくかく)と流(なが)れ去(さ)っていき(い)きます。それを仏教(ぶつぎやう)では「無常(むじやう)」と言(い)います。

（諸行(しよぎやう)無常(むじやう)、是生(ぜしじゆう)滅法(めつぽう)、生滅(せいめつ)滅已(めつじ)、寂滅(じやくめつ)為楽(わがく)）の四句(しご)が基(もと)になっ(な)っていること(こと)や、雪山(せきざん)童子(どうし)にちなること(こと)など(など)を(を)書(か)きました。今月号(こんげつごう)では、さら(さら)に「諸行(しよぎやう)無常(むじやう)偈(ぎ)」（無常(むじやう)偈(ぎ)）の日本(にっぽん)での展(てん)開(かい)を(を)見(み)て(て)みた(みた)と思(おも)います。

わけ画期的(かくてき)な発想(はつしやう)を(を)なされた方(なた)が(が)います。それは、平安(へいあん)時代(じだい)末期(まき)に生(う)まれた真言宗(しんげんしゆう)中興(ちゆうきゆう)の祖(そ)と崇(た)められる覚鑿上人(かくさくじやうにん)（興教(きぎやう)大師(だいし)）（一〇九五(じゆご)～一四三三(じゆさん)）です。皆(みな)様(さま)も毎(まい)日(にち)のお勤(おごん)めの中(なか)で「南無(なんぶ)興(きん)教(ぎやう)大師(だいし)」とお唱(おとな)え(え)になっ(な)っている(っている)のではない(ない)でしょうか。



弘法大師(こうぼうだいし)空海(くわい)作(さく)とも伝(つた)わる「いろは歌(いろはうた)」(絵(え)・橋本(はしもと)豊治(ゆづる))

「積(つみ)」。いろは歌(いろはうた)とは、ご存(ぞん)じ(じ)のように全(ぜん)ての仮名(かみな)が重(おも)ならないよう(よう)に作(つく)られた七五調(しちごてう)の四十七文字(しじゅうしちぶんじ)です。

覚鑿上人(かくさくじやうにん)は、「諸行(しよぎやう)無常(むじやう)は「色(しき)は匂(にお)へど散(ち)りぬるを」(香(か)りよく美(う)しく吹(ふ)き誇(たか)る花(はな)も、いつか散(ち)つてしま(しま)う。」「是(こ)は生(せい)滅法(めつぽう)」は「我(われ)が世(よ)誰(たれ)ぞ常(じやう)ならむ」(この世(よ)に生(せい)きる私(わたし)も、いつま(いつま)でも生(せい)き続(つづ)けること(こと)はでき(でき)ない。」「生(せい)滅(めつ)已(じ)は「有(あ)る為(ため)の奥山(おくさん)今日(けふ)越(こ)えて」(この無常(むじやう)の惱(なご)みが絶(た)えない迷(まよ)いの奥山(おくさん)を今(いま)乗(のり)り越(こ)えて。」「寂滅(じやくめつ)為(ため)楽(らく)」は「浅(あ)き夢(ゆめ)見(み)じ迷(まよ)いの心(こゝろ)と説(せつ)いていま(いま)す。

ここで思(おも)い出(で)されるのは、覚鑿上人(かくさくじやうにん)の次の和歌(わが)です。

弘法(こうぼう)大師(だいし)空海(くわい)（七七四(しちしちよ)）八三五(はちさんご)「十住心論(じしじゆうしんろん)の秘(ひ)密(みつ)莊嚴(じやうげん)心(しん)」に説(せつ)かれるよ(よ)うな「生(せい)死(じ)即(じやく)涅盤(ねつぱん)」（迷(まよ)いがそのま(ま)ま悟(さと)りであること(こと)）の境地(けんぢ)を説(せつ)いて(いて)いる(いる)と考え(を)えられ(ら)れます。即(すなは)ち、上(う)の句(ご)の「夢(ゆめ)の中(なか)は夢(ゆめ)もうつも夢(ゆめ)なれば」で「生(せい)死(じ)」の迷(まよ)いを表(あらわ)し、下(した)の句(ご)の「覚(さ)めなば夢(ゆめ)もうつつとを(を)しれ」で「涅盤(ねつぱん)」の悟(さと)りに達(た)した境地(けんぢ)を明(あ)かして(して)いる(いる)と思(おも)われる(われる)のです。「いろは歌(いろはうた)」で歌(うた)われるよ(よ)うな、無常(むじやう)の夢(ゆめ)の世(よ)で自(みづか)ら迷(まよ)いの自(みづか)ら迷(まよ)い、それを乗(のり)り越(こ)えること(こと)によ(よ)つて、はじ(は)じめて夢(ゆめ)も悟(さと)り

りそのもの(もの)であ(であ)ったと知(し)ること(こと)が(が)でき(でき)ると歌(うた)つて(つて)いる(いる)のではない(ない)でしょうか。

大阪北部地震の被災者の皆様に御見舞い申し上げます

六月十八日の大地震により被災された多くの皆様に謹んでお見舞い申し上げます。災害により犠牲となられた方々の御冥福を、心よりお祈り申し上げます。そして、一刻でも早い復興と、平安なる日々が訪れますようご祈念申し上げます。

大本山 高尾山 薬王院